

明治小説にみる京都方言

—清水紫琴「心の鬼」(明治30年)を資料として—

村中淑子

桃山学院大学

tmuranaka@andrew.ac.jp

Kyoto Dialect in a Novel of the Meiji Era

: SHIMIZU Shikin 1897 “*KOKORO NO ONI*” (Ogre in the Heart) as a Document

MURANAKA Toshiko

St. Andrew's University

Key Words: Honorific Expressions, Copula da/zya/ya, Negative Suffixes,

Linguistic Identity, Kansai Dialect

1 はじめに

主に明治20年代に活動した小説家、清水紫琴(1868-1933)の「心の鬼」(『文藝倶楽部』第3巻第2編、明治30年1月20日発行、博文館)のセリフ部分を、方言学の観点から分析し、報告する。分析対象とした言語項目は、待遇表現、ダ・ジャ・ヤ関連表現、否定辞、などである。清水紫琴は京都方言のネイティブであると考えられるが、京都方言を用いた作品は「心の鬼」しかないためか、今までにその方言に注目した分析は無かったようである¹。

2 資料について

2.1 明治期の関西方言の資料について

明治期における関西方言の資料として活用されているものは多くないようである。

直前の時代の近世後期の口語資料としては、洒落本や噺本、滑稽本、雑俳などがある。

明治期については、大阪方言を反映した資料としては、明治20年代の落語速記本、および明治36年以降の落語SPレコード文字化資料が主なものである(金沢裕之(1998)に詳しい記述がある)。

明治期の大阪方言を反映する、落語以外の口語資料としては、村上謙(2010)が用いた上司小剣(1874-1948)の小説34作品(1908~1926)や²、村上(2013)が紹介している曾我廼家五郎(1877-1948)による喜劇脚本群がある。

明治期の京都方言を反映した資料としては、辻加代子(2009)の調査によれば、辻の発掘した資料、すなわち落語家の初代桂枝太郎(1866生)および四代目桂文吾(1865生)の落語口演速記録およびSPレコードなどがあるとのことである(口演速記もしくはSPレコードの刊行・発売年は、それぞれ

明治30年・32年・大正12年と、明治32年・35年・43年)。

以上のような状況、すなわち明治期の関西方言資料として使われているものが少なく、特に当時の京都方言の資料が希少であるという状況から考えると、明治期のネイティブの京都方言を反映する資料として、1作品に過ぎなくても、紫琴の「心の鬼」を分析することに意義があるのではないかと考えられる³。

2.2 明治30年頃の雑誌における文体について

本稿で扱う「心の鬼」は、雑誌『文藝倶楽部』3-2(1897(明治30)年)に掲載されたものである。当時の雑誌の文章はどのようなものだったか、簡単に確認しておく。

『文藝倶楽部』(1895～1933刊行)は、国立国語研究所編『太陽コーパス』に収められた『太陽』(1892～1928刊行)と同じく、博文館から出版された雑誌である。『太陽』が総合雑誌であるのに対し、『文藝倶楽部』は名前の通り文芸雑誌であった。『太陽』は、本文の様態として、引用表示法が多様・句読法が多様・振り仮名が豊富・仮名遣い規範が未整備といった特徴があり、発行年によって口語文が増加していく様子が伺える資料である(以上の『太陽』についての説明部分は、田中牧郎(2005)に因っている)。

『文藝倶楽部』は、月1回発売、年4回臨時増刊の雑誌であったようだが、「心の鬼」が掲載されている『文藝倶楽部』第3巻第2編は明治30年1月20日発行の臨時増刊号で、「閨秀小説」特集である。執筆者は中島湘烟・小金井喜美子・三宅花圃などそうそうたる顔ぶれで、前年に亡くなった若松賤子・田澤稲船・樋口一葉の作も掲載されている⁴。この若松・田澤・樋口の3作品を見ると、様態・文体が少しずつ異なっている。若松はセリフ部分を『 』でくくっているが、田澤はセリフの開始部分だけに『をつけている。樋口はセリフ部分を括弧でくくらず、本文の中に埋め込む形としている。文体は、若松は「小公子」の翻訳で有名な口語体で、文末は「…でした。」「…ました。」「…しませんでした。」「ありませんかった。」「…しておったのでした。」等となっている。田澤と樋口は口語体ではないが、田澤のセリフ部分は当時の東京のはなしことばをかなり忠実に写したのではないかとと思われるもので、「それぢやまだ早いねエ」「あの奥様がにくらしいワ」「私しゃほんとにおどろいてよ」などのセリフが見られる。

このように、明治30年ごろの『文藝倶楽部』は、上記の『太陽』と同様、引用表示法が統一されず、口語文・文語文も混在したものであった。そうした、言文一致がまだ完成していない時代に⁵、清水紫琴の「心の鬼」(150～178頁)も掲載されていた⁶。セリフ以外の部分は文語であっても、セリフ部分は口語であり、方言的特徴も含めて、当時の実態を写し取ったものと考えてもよいのではないかとと思われる。

2.3 小説のセリフを方言の資料とすることについて

一般的に、現代語の実態を最もよく反映する資料は、自然会話の録音であると考えられる。それが得られない場合は、自然発生ではない会話、すなわち落語や演劇等における会話(の文字資料もしくは録音資料)、あるいは執筆されたのと同じ時代を舞台にした文学作品のセリフ部分を用いるのが次善の策であろう。明治時代のことばに関しては、自然会話の録音はほとんど無いと考えられることから、文学作品のセリフを資料として採用することが実態をつかむための有力な方法となりうる。

しかし、落語、演劇、小説のセリフはいずれも、演者や作者が現実とそっくりのものを作り出すとは限らない。リアリズムをどの程度、どのように追求するかは、演者・作者によって異なる。作品世界を構築するため、何らかの効果をj得るために、意図的にリアリズムから離れる場合もあり得る⁷。当時の言語実態を探るためには、種類の異なる複数の作品を照らし合わせて検討するしかない。そういう意味で、本稿における分析結果は、他のものとの比較検討によって検証される必要がある。

2.4 清水紫琴について

清水紫琴(1868-1933)は、「明治文学史ならびに女性解放史の研究者たちの一部に知られ」た存在である⁸。これは1983年発行の『紫琴全集』の「あとがき」に古在由重(紫琴の次男。全集を編集)が書いたことだが、おそらく現在も同様の状況にあると思われる。

紫琴の略歴を次に記す。

1868年に現在の岡山県備前市で生まれ⁹、1870年、満2歳で京都市(麩屋町御池下ル)へ一家で移住。その後、一家は京都市上京区木屋町二条下ルへ転居。1881年、満13歳で京都府立第一高等女学校(当時の名称は「府女学校および女紅場」)小学師範諸科卒。1885年頃最初の結婚をし、夫とともに人権運動・女権拡張運動にかかわったが1889年ごろ離婚。1890年満22歳で上京し、『女学雑誌』へ入社、この年のうちに主筆・編集責任者となり、探訪記などを執筆。1891年に体調を崩す。1892年満24歳で古在由直と結婚。1894年に編集記者を辞し、以後不定期に寄稿。1895~1900年、夫の留学の間、姑の住む京都花園¹⁰へ移住。1896年から紫琴の号で小説を次々に発表(「心の鬼」もこの時期)。1900年、夫の帰国に伴い、家族で東京へ転居。1901年を最後に、筆を折る。

以上の通り、紫琴は2歳から少なくとも17歳頃まで家族とともに京都に住み、京都の学校を卒業している。京都方言のネイティブ話者と見てよいだろう。さらに、17歳頃~21歳頃まで最初の結婚生活を関西で過ごし(下女などを使う生活だったらしい)、27歳~32歳には、2度目の結婚の姑とともに、京都で育児・家事・執筆をしながら5年間過ごしていることから、子供・生徒としての方言生活だけでなく、大人としての方言生活を十分に経験していると考えられる¹¹。

『紫琴全集』「第1部 小説」に13編の小説が収められているが、「第2部 評論・随筆・その他」にもごく短い小説が混じっている。気迫のこもった文を書くが、柔軟で、風刺や諧謔味のある文章も得意としていた。小説の中では1891年「こわれ指環」が代表作のようである。関西方言(京都方言)が出てくるものとしては、「心の鬼」だけのようである¹²。

2.5 「心の鬼」のあらすじおよび登場人物と発話数

「心の鬼」のあらすじを簡単に述べると、次の通りである。

京都西陣の富裕な商人庄太郎（35、6歳）は吝嗇家である。彼は美しい妻のお糸が心配でたまらず、自分の留守中のふるまいについてこまごまと注意を与える。家族で嵐山へ花見に出かけた際にお糸の知り合い（幸之介）に出会ったり、怒った庄太郎に家を追い出されたお糸が庄太郎の叔父に仲介を頼んだり、重病の母に会いにお糸が実家へ帰ったりするが、その度に庄太郎はお糸に浮気の疑いをかける。お糸は耐え忍び、先妻の子のお駒（7歳）とも睦まじく暮らしていたが、庄太郎はとうとうお糸を倉庫に閉じ込める。お糸は病み衰えていき、噂を伝え聞いた義父重兵衛（母の夫）が実家（京都六角辺の旧家）へ連れ戻す。庄太郎は嫉妬に狂い、暴れる。

登場人物と発話数をまとめたものが次の表1である。発話の数は注に記す¹³。

表1 登場人物と発話数

性別	庄太郎	叔父	重兵衛	番頭	丁稚の 長吉	その他の使 用人たち	幸之介	医者	小 計	計
男性 話者	110	9	9	6	5	11	2	2	154	199
女性 話者	お糸	お駒	お糸の 母	下女 たち					小 計	
	29	5	2	9					45	

（番頭・丁稚以外の男性使用人3人ほどと、下女たち¹⁴は、それぞれひとまとめにした。）

発話数は、庄太郎が全体の約55%を占めている。次に多いお糸が約15%。多くが夫婦の会話であり、かつ、庄太郎の一方的な発話が多い。しかし、数は少ないが庄太郎の叔父やお糸の義父重兵衛による大人の男の重みのある発話、子供お駒や丁稚長吉の礼儀正しいがこどもっぽい発話、男性使用人たちのうちの会話、女性使用人たちの主人に対する発話、などバラエティはある。

3 分析

3.1 待遇表現

待遇表現をみるのに先立ち、誰が誰に向けた発話がどれだけあるかを、次の表2に示す。発信者から見て、受け手の社会的立場が明らかな目上と思われる場合は↑、目下と思われる場合は↓をつけ、どちらとも判定しがたい場合は無印とした¹⁵。「*↓」としたのは、目下ではあるがかなり気を使った物言いをしている関係である。縦軸左の人名は、スペースの関係上、一文字に省略した。縦軸と横軸の人物の並び順は同じである。

表2 発信者と受信者の立場の上下

		受け手 (男性)							受け手 (女性)				独り言	計	
		庄太郎	叔父	重兵衛	番頭	長吉	他の使用人	幸之介	医者	お糸	お駒	お糸の母			下女たち
発信者 (男性)	庄		↑3	↑3		↓7	↓1			89			↓4	3	110
	叔	↓2								↓7					9
	重	*↓3							1	↓5					9
	番					↓3	↓3								6
	長	↑1			↑1		↑2							1	5
	他					↓8	3								11
	幸									2					2
発信者 (女性)	医			2											2
	糸	14	↑2	↑2				2			↓6	↑2	*↓1		29
	駒									↑5					5
	母									↓2					2
	下	↑6								↑3					9
計		26	5	7	1	18	9	2	1	113	6	2	5	4	199

↑をつけた発話の合計は30、↓をつけた発話の合計は52（うち、「*↓」は4）、無印が117である。すなわち、明らかな目上に対する発話が30、目下に対する発話が52となる。

待遇表現の言語項目としては、素材待遇のハル・オ～ヤス・オ～ナサル・ヨル・オル、対者待遇のドス・マスル・ゴザルなどに注目し、出現数をまとめたのが次の表3である。

表3 「心の鬼」にあらわれる待遇の助動詞

語形	素材待遇 (上向き)					素材待遇 (下向き)		対者待遇 (上向き)		
	ハル	オ～ヤス	オ～ ナサル	ナハル	テ指定	ヨル	オル	ドス	マスル	ゴザル
男性	9	1	1	0	0	4	2	2	8	10
女性	3	11	0	0	0	0	0	11	5	13
計	12	12	1	0	0	4	2	13	13	23

(女性話者が使う 11 例のオ～ヤスの中に、1 例だけオのつかないものを含んでいる。)

上向きの素材待遇は、男性はハルが多く、女性はオ～ヤスが多いという傾向がみえる。ナサルはオ～ナサルの形の 1 例だけで (下記の 174)、ナハルやテ指定は全く現れない。

【174】家の方はどうなと致しますさかい、お心置なしお留置なすつて。(庄太郎→重兵衛)¹⁶

ハルの出現形を全て挙げると次の通り。(カッコ内は、発話者/待遇の対象。表記は新仮名遣いに改めている。)

表4 ハルの出現形

上げとかはる (店の者/庄太郎)	言うてはった (店の者/庄太郎)
行かはる (長吉/庄太郎)	行てはった [=行つてはった] (お糸/幸之介)
言わはった (店の者/庄太郎)	かかてはる [=かかつてはる] (長吉/庄太郎)
言わはりました (長吉/庄太郎) 2回	しくじつてはる (庄太郎/庄太郎の父)
言わはりました (お駒/同級生)	気にしていやはった (番頭/庄太郎)
	焼いてはる (お駒(同級生)/庄太郎) ★

(右側の欄は助詞テを介して動詞についたものである)

テを介するものはテハルの形がほとんどで、タハルは現れない。1つだけテイハルがある。

テを介さない例はすべて五段動詞で、ア段で終わる動詞部分にハルが接続し(「言わハル」など)、イ段で終わる動詞部分にヤハルが接続する形(言いやハルなど)は、現れなかった。

ここで一段動詞にハルがついた例は、テイハルの「イヤハル」1例だけである。数が少ないので、「五段動詞にはハル、一段動詞にはヤハルが接続する」と一般化してよいかどうかは不明である。また、表4の通り、この小説の中ではハルの否定形は現れなかった¹⁷。

ここで使われたハルはすべて第三者待遇であり、話し相手待遇に使われた例はない。

ハルの使用者は、男性は35、6歳の庄太郎、おそらく10代の丁稚長吉、おそらく20代～30代くらいの店の者たち、女性は20代のお糸と7歳のお駒である。大人も子供も、男女に関わらずハルを使

うようすが伺える。

丁稚や店の者が自分の店の旦那である庄太郎の動作につけたり、庄太郎が自分の父の動作につけたりするので、上向き待遇であることは確かである。身内の目上を話題にするときに使いやすい形なのだろう。お駒が同級生の動作につけていることから、さほど高い待遇でなくても使えることがわかる。

★をつけたのは、他の話者の発話を引用した中にハルが出てくるものである。次の通り。

【102】学校で隣のお竹さんや、向ひのお梅さんが、あんたそこにはお父ツさんが、毎日焼いてはるさかい、たんと焼餅があるやろ、いんだらお母アはんにお貰ひて。(お駒→お糸)

これはお駒が学校から帰ってきてお糸に訴えるところで、「あんたそこ～お貰ひ」の部分が同級生の発話からの引用である。

オ～ヤスの出現形を全てあげると、次の通りである。(表記は新仮名遣いに改め、漢字仮名遣いは読みやすさのため適宜、変えている。)

表5 オ～ヤスの出現形

話し相手待遇 (発信者→受け手)	第三者待遇 (発信者→受け手/待遇の対象)
いつのまにお出来やしたの (幸之介→お糸)	お言いやして (下女→庄太郎/お糸)
ゆっくりと行ておいでやす (お糸→庄太郎)	召しかえやして (下女→庄太郎/お糸) *
見ておくれやす (お糸→庄太郎)	お遊びにお出やすように
何にも心配おしやすな (お糸→庄太郎)	(お糸→幸之介/幸之介の妹)
お待ちやす (下女→庄太郎)	
お言いやす (下女→お糸)	
なぜ…お帰りやさんのどす (下女→お糸)	
おくれやはんか (お駒→お糸)	
何もご心配おしやはんと (お糸→母)	

オ～ヤスは、ハルと異なり、話し相手待遇と第三者待遇の両方に使われている。

幸之介以外は、すべて女性が使用している。幸之介は「愛想よし」で「お駒の頭撫でなど」する「商家の息子株とも見ゆる」「廿五、六の優男」なので、言葉遣いも優しく上品に描かれているのであろう。

話し相手待遇は、幸之介のセリフ以外は、相手に何らかの行動を指示する(柔らかく命令する)文脈で使われている。直後にナを付けた形(おしやすな)はスルナという禁止命令の柔らかな形である。

オイデヤスやオクレヤスをみると定型化したもののように見えるが、「言う」「待つ」「する」「出来る」などの動詞にも接続しているところから、オ～ヤスは様々な動詞について使われていたと考えられる。

直後に否定形を接続したものが3例ある。「お帰りやさんのどす」は「オ+カエリ+ヤスの未然形+否定のン+ノ+ドス」で、「お帰りにならないのですか [=お帰りになったらいいのに]」の意味にとれる。

「おくれやはんか [=くれませんか]」「ご心配おしやはんと [=ご心配なさないで]」については、上記の「お帰りやさんのどす」に類したものと考え、「オクレヤサンカ」「オシヤサント」の s 音が h 音に変化したと解釈し、ここに並べた¹⁸。

下女の使う「召しかえやして」(表 5 で*を付した) だけが、オのつかない形である。1 例だけなので、オのつかない形が一般的であったかどうかは判断できないところである。

まとめると、オ〜ヤスは女性のよく使う形で、第三者待遇も対者待遇も可能であるが、対者待遇の場合は、おもに指示・命令表現として使われるといえる。

次に、下向きの素材待遇を見てみよう。女性話者には現れないが、男性話者には、ヨルとオルが現れる。

ヨルの例は次の 4 つである。

- [37] 子供の割にはよう喰ひよるさかい (庄太郎→お糸) *「子供」は丁稚の長吉
 [41] みんながてんこ盛りに盛りよるさかいな (庄太郎→お糸)
 [70] しんしよが悪い癖に、生意気に時計を掛けてよるさかい (庄太郎→お糸)
 [71] あほな奴なア、七八円の金を寐さしといて、人の役に立てよる。(庄太郎→お糸)

初めの 2 例では、庄太郎が吝嗇ぶりを発揮し、使用人がご飯を多く食べたり盛ったりすることを嫌っている。後の 2 例では、隣家が時計を所有することをけなしている。庄太郎が使用人のことを話題にするとき、動詞に待遇の助動詞がつくことはほとんどない。つまり通常は待遇の助動詞をつけないで話題にするような人物に対し、嫌悪感を表したり軽く馬鹿にしたりするときヨルを使っている。これらは全て第三者待遇である。

オルの例は次の 2 つである。

- [132] ナ何というた、おれが疑深ひーおのれツ人にあくたい吐きおるな。(庄太郎→お糸)
 [196] どうも困つたなア庄太郎が男のやうでもない、女房の里から離縁を申し込まれて、酔の蒟蒻のと離縁をしおらんじや。(重兵衛→お糸)

132 が話し相手待遇、196 が第三者待遇という違いはあるが、いずれもその人物の行動を強く非難する場面である。ヨルよりもオルが強いニュアンスをもつと考えられる。

次に、対者待遇の助動詞をみる。

ドスは、男性 2 例と女性 11 例がみられた (デス・デショウやダスは全く現れない)。

まず男性のドスの 2 例を挙げる。

- [107] これはこれはお糸さん、あなたも今日はお花見どすか。(幸之介→お糸)
 [164] へイアノ人力どすか、なんぼ位で応対致しませう。(長吉→庄太郎)

女性の 11 例の内訳は、お糸 7・お駒 1・下女 3 である。いくつか例を挙げる。

- [95] へイお昼どす。(お駒→お糸)
 [98] お焼きといふものどすへ。(お糸→お駒)

【60】私も心配どすさかい。(お糸→庄太郎)

【189】まアあんたはんの今日この頃の御顔色はどうどすやろ。(下女→お糸)

女性話者の中で最も発話数の多いお糸を観察すると、ドスは7回使われているが、庄太郎とお駒に向けてのものであり、その他の話者に向けては使っていない。母親に向けては、同様の文脈で、ドスではなく、デゴザリマスルを用いている。

【178】さうでござりまする、誠にやさしい人で、私も幸福でござりまする。(お糸→母親)

重兵衛に向かつては、言い切らない表現となっている。

【194】とかく人と申すものは、悪い事はいひたがりまするもので。(お糸→重兵衛)

これらを見ると、より上位の待遇を示す場合は、ドスではなく、デゴザリマスルや言い切らない形を用いるものようである。

マスルの使用者の内訳は、お糸5・庄太郎7・重兵衛1である。お糸は、母親・叔父・庄太郎に向けて用いており、「ござりまする」の形が4回、「承ってみますれば」が1回である。庄太郎は、叔父と重兵衛に向かつて使っており、「恐れ入りまする」が1回あるほかは「ござりまする」の形である。重兵衛の用いた1回は、医者(おそらく重兵衛と同年輩の)に向かつてのセリフで、「どうもよほどむつかしうに見えまするな」というものである。

ゴザルをみると、庄太郎の場合は全てマスルと組み合わせて、ゴザリマスルの形で使っている。お糸の使うゴザルは、ゴザリマスルのほかにも、「宜しうござりまする」「～でござりまする」「～でござりました」「～ではござりませぬ」「～はござりませぬ」の形があり、1例だけ、「ではございませぬ」と音便形になっている。庄太郎およびお糸にとって、ゴザルは、マスルもしくはマス・マシタ・マセヌと重ねて使うものようであり、その丁寧さは、マス単体やドスよりも上位に位置づけられているようである。

男性でゴザルを使うのは、庄太郎のほかは、重兵衛である。重兵衛は、医師に対しては、「滅多な事はござりまするまいか(発話166)」と、ゴザルとマスとの併用を行なっているが、庄太郎に対しては、「済まぬことでござった。(発話170)」「母親なりお糸なり心がいつそう不憫でござる。(発話171)」のように、ゴザルを用いいつも敬体でない形なのである。重兵衛が、庄太郎に対して、敬体を使わないという訳ではない。「そこでどうぞここ二三日の内お糸をお借り申す訳には行きますまいか。(発話172)」のように、マスを用いて庄太郎に依頼するセリフもあるのである。

この、敬体でない文におけるゴザルを、どのようにとらえたらよいだろうか。重兵衛からみて、庄太郎は婿であり一世代下であるという点では目下であるが、義理の娘の夫という点で、遠慮や隔てもあるのだろう。またどちらも商家の主人で、社会的立場もある者同士なので、さほどくだける訳にもいかない。重兵衛は庄太郎に対して、基本的には敬体を使うのであるが、ゴザルにマスル・マスなどを重ねる形は丁寧になりすぎるのであろう。ある程度の丁寧さはありながら、上位に待遇しすぎない、という繊細な調整をことばづかいに関して行なっているようである。

3.2 ダ・ジャ・ヤ関連表現

指定の助動詞ダ・ジャ・ヤに関連する語形を数えた。ジャ・ヤ・ヤロの出現は、表6・表7の通りである。ヤロウという形は無かった。ジャロ・ジャアロ・ダ・ダロもみられなかった。

表6 ジャ・ヤ・ヤロの出現形式

	言い切り	～ナイカ	～サカイ	～ガナ	その他	計
ジャ	32	ジャナイカ 3	ジャサカイ 1	ジャガナ 1	ジャナイガナ 1 ジャガ 4	42
ヤ	5	ヤナイカ 2	ヤサカイ 7	ヤガナ 4	ヤケド 6 ヤノニ 1 ヤナ 1 ヤッタ 2	28
ヤロ	11		ヤロサカイ 1	ヤロガナ 2	0	14

表7 人物ごとのジャ・ヤ・ヤロの使用

	庄太郎	叔父	重兵衛	店の者	お糸・お駒・下女	計
ジャ	言い切り 26 ジャナイカ 3 ジャナイガナ 1 ジャガ 3	言い切り 5	言い切り 1 ジャサカイ 1 ジャガ 1	ジャガナ 1	0	42
ヤ	言い切り 2 ヤナイカ 1 ヤサカイ 3 ヤケド 3 ヤガナ 2 ヤナ 1 ヤッタ 1	言い切り 1 ヤケド 2 ヤサカイ 1 ヤガナ 1	0	言い切り 1 ヤサカイ 3 ヤガナ 1 ヤケド 1 ヤノニ 1 ヤッタ 1	言い切り 1(下女) ヤナイカ 1(お糸)	28
ヤロ	言い切り 3 ヤロサカイ 1 ヤロガナ 1	言い切り 2	0	言い切り 4 ヤロガナ 1	言い切り 1(お駒) 言い切り 1(下女)	14

ジャ・ヤ・ヤロは、いずれも言い切り形の出現があり、～サカイ・～ガナにも接続する。ジャ・ヤは、～ナイカにも接続する。

過去形は、ヤッタだけであり、ジャッタ・ダッタはみられない。

ジャは、男性は庄太郎・叔父・重兵衛・店の者たちと広く使われているが、女性には使われていない。また、ジャの言い切りは、店の者たちは使っていない。ジャの言い切りは、ある程度の年齢・地位を得た男性が使うということかもしれない。

ヤ・ヤロは、男性・女性とも使っており、年齢にも関わらないようである。

表6・表7に含めたものの中から、ノヤ・ノジャの形を取り出してみたのが次の表8である。(表記は新仮名遣いに改め、漢字仮名遣いは読みやすさのため適宜、変えている。)

表8 ノヤ・ノジャの出現

ノヤ 11 例	ノジャ 6 例
しくじってはる <u>のや</u> 。(庄太郎→お糸)	それでよい <u>のじゃ</u> 。(庄太郎→お糸)
置いてある <u>のやさ</u> かい。(庄太郎→お糸)	ついて来た <u>のじゃ</u> 。(叔父→庄太郎)
堪忍してやる <u>のや</u> けどな。(庄太郎→お糸)	<u>何</u> を言うてた <u>のじゃ</u> 。(庄太郎→長吉)
今時分までかかてはる <u>のや</u> がな。(長吉→独り言)	<u>なぜ</u> …逃げていく気になった <u>のじゃ</u> 。(庄太郎→お糸)
ちょうどよい <u>のや</u> けど。(庄太郎→お糸)	<u>どう</u> した <u>のじゃ</u> 。(庄太郎→お糸)
一晩位泊めてもよい <u>のや</u> けど。(叔父→お糸)	<u>どこ</u> にいる <u>のじゃ</u> 。(庄太郎→お糸)
道理を言うてみた <u>のや</u> 。(庄太郎→お糸)	
もう12時は過ぎた <u>のや</u> 。(叔父→お糸)	
思うた <u>のや</u> けど。(叔父→庄太郎)	
いつ大阪へ行かはる <u>のや</u> ろ。(長吉→独り言)	
言いつけられて来た <u>のや</u> ろ。(番頭→長吉)	

同じ機能を持つ「ンヤ・ンジャ・ネン・ネヤ・ネ・ニヤ」は、全く現れなかった。また、ノヤ・ノジャの直前拍が撥音化する現象(あるノヤ>あんノヤ、等)もみられなかった。

表8をみると、疑問詞(四角で囲った)と組み合わせて使われているのは、ノジャである。疑問詞とノジャの組み合わせは、どれも質問ではなく、詰問の意図を持つ文である。詰問の意図の場合に、ノヤでなくノジャが使われやすいのかもしれない。

また、現代の関西方言ではよく聞かれるヤロカという形がこの資料にはみられなかった。ヤロカの使われそうな文脈に現れるのは、例えば次の形である。

【163】そんならやはりほんまかしら。(庄太郎→独り言)

【62】また何にもいふ事はなかつたかしらん。(庄太郎→お糸)

【35】一杯づつ違ふとして見ると、コーツとなんぼになる知らん。(庄太郎→お糸)

【38】そうするとどれだけになる知らん。(庄太郎→お糸)

コッチャという形が庄太郎の発話の中に8例あらわれた。これは、「知れたこつちや。」「同じこつちや。」「といふこつちや。」のように文末にくるものと、「飯時のこつちやがな、」「といふこつちやさかいな。」のように後ろに続く場合がある。コッチャ<コトヤと、コッチャ<コトジャの、どちらの可能性もあると考えられるため、表6・表7には含めなかった。

3.3 否定表現

動詞の否定に関係する表現を数えたのが次の表9である。

表9 否定表現（動詞にかかわるもの）

	ヌ	ン	ヘン	ナイ	ナンダ	ネ	ズ	イデ	マイ
男性話者	34	14	0	0	1	2	3	3	8
女性話者	10	6	0	0	1	2	0	0	0
計	44	20	0	0	2	4	3	3	8

否定辞はヌが多く、ンがそれに次ぐ。動詞につくナイは無かった。

ヘンは無かったが、その前身とみえるセンがあった（表9ではンの中に含めている）。「構はせん」2例で、カマイワセヌ>カマワセンと変化したものであろう（カマワセヌの形を経由したかどうかは不明）。

動詞の否定形がヌになるカンになるかについては、ある程度の傾向性が見いだせるようである。

後ろが形式名詞の場合、ヌである。「分からぬこと」「かなはぬ筈」「すまぬ事」「ならぬこつちや」「いらぬもの」などがある。

また、後ろが引用の助詞の「と」の場合、ヌである。「気がつかぬとは」「出迎へぬといふ」「及ばぬといわりました」「付かぬといふ」「出ぬとて」「逢はせぬといふような」「死なねばならぬと」がある。

しかし、接続助詞のサカイやケレド、終助詞のかは、ヌにもンにもついている。

ンになっていたのは、次のようなケースである。

「知らん」は4例あるが「知らぬ」は無い。時代が下るにつれてヌがンに変化したとすると、まずは「知る」のような頻繁に使われる動詞の否定形から、ンに変化していったのかと考えられる。

「マアそないにくよくよせんと」「ご心配おしやはんと」のように、「～ント」が「～ないで」の意味になる例では、ヌトの形は現れない。

3.1の表5にも出て来た「オ～ヤス」の否定形は、すべてヌではなくンになる（「おくれやはんか」「お帰りやさんのだす」「おしやはんと」…表9のンに含めてある）。

ほかには、ネバナラヌが3例（「行つてこねばならぬ」「死なねばならぬ」「狭めねばならぬ」）みられる一方で、ンナランの形が2例（「振る舞はんならん」「別れんならん」）みられた。

マセヌ8例に対し、マセンは1例（「すみませんけれど」）、マヘンが2例（「しまへんさかい」「帰っ

て貰いまへんと) がある。

オヘンが2例(「おへんやないか」「笑ろうたのやおへん) あったが、動詞の活用形ではなく形容詞ととらえて、表9のンの欄には入れなかった¹⁹⁾。

過去形はナンダのみである(「帰らなんだ」「知らなんだ)。動詞に接続するナカッタ・ンカッタは無い。

ネは、「入らねば」「狭めねば」のように、接続助詞のバの前このみ現れる。

イデは「怖い顔せいでも」「気かけいでも」「聞かせいでか」の3例である。類義表現の、ンデ・ナクテは無かった。

マイ8例のうち、「忘れまいぞ」「口をすべらすまいぞ」は「～マイゾ」の形で「～ないようにせよ」という意味の命令表現となっている。「行きますまいか」「ござりますまいか」の形もある。「～マスマイカ」の形で「～ませんか」に当たるものとなっている。

以上見たように、動詞に関わる否定表現としてはナイは現れなかったが、ナイ自体が全く現れなかった訳ではない。次の表10にまとめた。

表10 ナイの出現

形容詞のナイ	13 (ナイ 12、ナカッタ 1)
名詞文の否定	デワナイエ 1 ジャナイガナ 1
断定の意図の ジャナイカ	体言+ジャナイカ 3 用言+ヤナイカ 2
動詞の打ち消しのナイ	0

(ヤンカ・ヤンは現れない)

「断定の意図」の例は次のようなものである。

【12】 ナアお糸さうじやないか。(庄太郎→お糸)

【183】 たとへお父さんに違ひないにしても、根が他人の仲じやないか。(庄太郎→お糸)

【117】 別に赤い顔をしたという訳もおへんやないか。(お糸→庄太郎)

12 はさほど強い語気ではなさそうだが、183 は庄太郎がお糸と義父を疑って強く責めており、117 はお糸が庄太郎の誤解を解こうと懸命に反論しているところである。

ヤンカ・ヤンは出現せず、また現在の関西方言でよく聞かれるトチガウカ・トチャウカも全くみられなかった。(また、ヘンがないので当然の帰結であるが、アラヘンもない。)

3.4 その他の表現

理由の接続助詞の出現回数については次の通りである。

表 1 1 理由の接続助詞

サカイ	ノデ	カラ	サカイニ	ヨッテ	ヨッテニ
40	2	1	0	0	0

サカイは、庄太郎・お糸をはじめとして、叔父や重兵衛、店の者たちも使っている。

ノデは庄太郎が重兵衛に丁重に（しかし言い訳がましく）話すところで連続して出てくる（「留守中にお糸を呼びに御遣はしになつたといふ事を承りましたので、ツイ私も取るものも取りあへず御見舞に出ましたので、…」発話 169）。カラはその後に重兵衛が庄太郎に説明するところに現れる（「が何分にもただ今お聞きの通りの次第でござるから…」発話 171）。

通常は誰でもサカイを使うが、気の張る相手に丁寧に話すときはノデ・カラを使うということではないか。ゴザルの直後にはサカイがつきにくいということもあるかもしれない。

終助詞で目につくのは、男性話者の使うゾ・ゾヨ・ゾイ・ゼである。

【4】たとへ家に召遣ふものでも男にはお前が直接にいひ付ける事はならぬぞ。(庄太郎→お糸)

【77】これ長吉ツどん、うつかり番頭さんに口を沁らすまいぞ。(店の者→長吉)

【3】いつもいふ事ぢやが、留守中は殊に気をつけて、仮りにも男と名の付くものには逢ふ事はならぬぞよ。(庄太郎→お糸)

【20】それ見イな、何が困る事があるぞひ。(庄太郎→お糸)

【81】なんのそんな事があるぞい。(店の者→店の者たち)

【115】それにしてお前の顔がをかしかつたぜ。(庄太郎→お糸)

このうちゾイは、上記の 20・81 を含めて 4 例出現したが、いずれも「何…ことがあるぞい」の形であり、定型句ではないかと思われる。

ゾ・ゼと類似の終助詞で、現在の関西方言で盛んに使われるものにデがあるが、「心の鬼」にはデはみられなかった。

4 まとめ

以上述べてきた内容から、清水紫琴「心の鬼」に現れる京都方言の特徴として次のことが言えよう。

- (a) 上向きの素材待遇の助動詞としては、ハルもしくはオ～ヤスがおもに使われる。
- (b) オ～ヤスは第三者待遇と話し相手待遇の両方に使われるが、ハルは第三者待遇のみ。
- (c) ハルは男女年齢を問わず使われるが、オ～ヤスは女性がおもに使う。
- (d) 話し相手待遇のオ～ヤスは、ほとんどが指示・命令表現として使われる。
- (e) ナハル・テ指定はあられなく、ナサルも1例のみであった。
- (f) 下向きの素材待遇の助動詞にはヨルとオルがある。
- (g) ヨルよりもオルのほうが強いニュアンスを持つ。
- (h) 対者待遇形式として、ドスは男女年齢問わず使われるが、デス・デンショウ・ダスは現れない。
- (i) ドスよりも丁寧さの要求される場面では、デゴザリマスルあるいは言い切らない形が現れる。
- (j) ゴザルにマス・マスルをつけないことで丁寧さの調整を行なう話者もいる。
- (k) 指定の助動詞としては、ジャ・ヤ・ヤロがあり、ジャロ・ダ・ダロは現れなかった。
- (l) 指定の過去形として、ヤッタはあるがジャッタ・ダッタは現れない。
- (m) ジャの言い切りは、年配の男性が使う傾向があるが、ヤ・ヤロは誰でも使う。
- (n) ノヤ・ノジャはあるが、ンヤ・ンジャ・ネン・ネヤ・ネ・ニヤは現れない。
- (o) 「詰問」の意図で言い切る場合は、ノヤでなくノジャが使われる。
- (p) 否定辞はヌが多く、ンがそれに次ぐ。
- (q) 形式名詞や引用の助詞「と」が後続するときにはヌが現れ、ンは、ンナラン [なければならぬ] やント [ないで] のような定型において義務的に現れる。
- (r) 「知らん」などの頻繁に使われる一部の動詞からヌ→ンの変化が進んだ可能性がある。
- (s) ～ヤセヌ・～ワセヌ由来の否定辞ヘンは現れないが、その前身とおぼしきセンが現れた。
- (t) 否定過去はナンダのみ現れた。
- (u) 動詞打消のナイが現れない代わりに、マイやイデなどが使われる。
- (v) 形容詞のナイおよび名詞文の否定のナイは現れた。
- (w) 断定の意図のジャナイカ・ヤナイカはあるがヤンカ・ヤンなどは無い。
- (x) 理由の接続助詞はサカイが盛んに使われ、ヨッテ・ヨッテニは現れない。

5 おわりに

本稿では、清水紫琴の小説「心の鬼」に出てくる京都方言のおもな文法項目をざっと観察した。

他の資料との比較・検討、たとえば、辻(2009)の指摘する明治の落語資料や金沢(1998)の落語資料などとつぎあわせての詳しい検討については、別稿を期したい²⁰。

- 1 木村東吉(1981)は、方言の現れる近代文学を網羅的にリストアップしているが、その中に清水紫琴は挙げられていない。木村(1981)が京都方言(山城地域)の現れる作品として挙げている中で、明治期刊行のものは、高浜虚子の「風流讖法」(明治40年)・「俳諧師」(明治41年)、夏目漱石の「虞美人草」(明治40年)、木下杢太郎の「南蛮寺門前」(明治42年)、谷崎潤一郎の「朱雀日記」(明治45年)の5作品である。
- 2 上司小剣については、村中(2015)においても、大正期の7作品を、待遇表現を調べるための資料として用いている。上司小剣(明治7年生)は奈良生まれであるが、明治20~30年大阪市移住。父が兵庫県川西市の多田神社宮司であるため小学校卒業まで川西市多田で育ち、その後大阪へ移り、明治30年上京まで大阪にいたとのこと。したがって、大阪方言(なかでも北摂方言)のネイティブ話者と考えるとよいだろう。
- 3 「心の鬼」は文字数20000字弱の短編で、そのうちセリフ部分は約7000字である。
- 4 『文藝倶楽部』第3巻第2編の「心の鬼」以外の作品については、デジタル化されたものを国立国会図書館にて閲覧した。若松賤子は翻訳作品「ローレンス」(241-265頁)、田澤稲船は小説「唯我独尊」(265-278頁)、樋口一葉は小説「うつせみ」(279-289頁)が掲載されている。
- 5 磯貝英夫(1981)によれば「わが国の小説界において、言文一致が全体を制圧するのは、明治四十年、四十一年」「そして、方言採用もそこから本格化してくる」とのことである。
- 6 雑誌掲載時の作者名は「紫琴女史」となっている。
- 7 落語・演劇・小説などの作品において、セリフの方言的特徴がリアリズムから離れる要因としては、(1)作品の受け手が他地域の出身者である可能性を慮り、方言的特徴を少し減らして理解しやすくする、(2)作品の受け手が持っている想定される、当該方言に関するステレオタイプに合わせることで、わかりやすい人物造型をはかる、(3)文字作品の場合は、当該方言の音声的特徴は聞き慣れていても、それをそのまま文字に起こしたものは見慣れていない読者が多いと考えられるため、音声的特徴に忠実に文字化するのではなく、文章語の規範的な形にやや近づけることで読みやすさをはかる、などが考えられる。
- 8 江種満子(2003)によると、清水紫琴は「一九七〇年代以後のフェミニスト批評によって現代に甦った女性作家の一人」とのことである。
- 9 次男の古在由重によれば、「戸籍のうえではその年の1月1日が誕生日になっているが実際はその前年のくれのうまれだったらしい」とのことであるが、実際の誕生日の日付が不明なので、1868年生まれという山口玲子(1977)の年表に従っておく。
- 10 京都には、下京区・左京区岩倉・南区唐橋にそれぞれ花園町という地名があるが、山口玲子(1977)によれば、紫琴が住んでいたのは、右京区の妙心寺に近い花園であったらしい。
- 11 清水紫琴の履歴については『全集』の略年表のほかにも内田聖子(2013)の記述も参考にしたが、そもそも山口玲子(1977)が自ら足を運んで詳細に調査したものであるようだ。
- 12 『全集』のあとがきには「あらゆる作品を完全にあつめた」とあるが、中山和子(1990)には『全集』未収録の評論3編のタイトルが挙げられている。小説で『全集』から漏れたものがあるかどうかは不明。
- 13 「行替え」もしくは「句点」がある場合、そこを発話の切れ目として数えた。これは『文藝倶楽部』掲載時の「心の鬼」の発話は、行替えおよび一字下げで表されているので、まず行替えが内容の切れ目とみなせるからである。行替えの最後部分は、句点だけでなく、「……」や、読点の場合もあるが、作者が行替えを付したことにより、発話として切ってあるものととらえた。そして「心の鬼」の句点の打ち方は、現代小説における句点の打ち方にかなり近い(明治初めの小説に見られるような、現在の読点に該当するところにも句点を打つというやり方はしていない)ので、句点で切ると、いわゆる「文」におおよそそのところは相当するのである。ただし、この切り方ではかなり長くなる発話もある。すなわち一般的には文の終わりとも見なせるような部分で読点が打たれている場合があるが、作者がそこは一息に続けて読むことを意図していると考え、行替えでない読点部分では一見して文の終わりに見えても切らないことにし、長くても一発話と見なした。要するに、発話切り作業で迷わない明瞭

さと、基準としての妥当さを合わせて考え、「行替え」と「句点」という形式的な基準で「発話」を数えた。ここで問題になりうるのは、次の(1)～(5)のような、本文に埋め込まれたセリフ的部分(下線を付した)である。とくに(4)(5)には方言的特徴として今回取り上げたジャ・ヤも含まれるのであるが(四角で囲った)、おおかたは(1)の下線部のような文語体、あるいは(2)や(3)の下線部のようなごく短いものなので、本稿では、本文埋め込み式のセリフ的部分は全て取り扱わないこととした。

(1) この事ありてより後は庄太郎、仮初の外出にもお糸への注意いつそう厳しく、留守の間の男の来りし事はなきや、お糸宛の郵便どこよりも来らざりしやと、店の者に聞き下女に聞き、

(2) 己れ大人を馬鹿にしたなど、三人が立ちかかりし時は長吉の影は、はや裏口の戸に隠れたり。

(3) 千鳥足なる酔どれの酔限斜めに見開きて、イヨー弁才天女と叫ぶがあれば、擦れ違ひざまに、よその女連のほんに美しい内方と囁きながら振返るが嬉しく、

(4) 面白からぬ心々を載せたればや、とかくに二人が擦れ合ふのみにて口も利かぬば、たまたまの事にまた旦那が箱やを起こして、ほんに陰気な事やつたと、下女も丁稚もつぶやきぬ。

(5) 重兵衛は聞き捨てならぬ娘の身の上、いかに嫁に遣つたればとて、命にまではのしは付けぬ。それにお糸もお糸じや、おれを義理ある父と隔て、それほどの事なぜ知らせてはくれぬ。ああ水臭い水臭い、それもお糸は承知の上であらふかなれど、里が義理ある中やさかい、よう帰らんのじやと人は噂するわ。よしよしそれではお糸を呼び寄せ、篤と実否を糺した上で、もし実情なら無理にでも、取戻さねば死んだ女房に一分が立たぬと、独り思案の臍を堅めつ、事に托してお糸を招きぬ。

14 下女は3人いるようだが、名付けも無く、特に区別がされていないので、まとめて扱う。また、「上み女(かみおんな)の梅」が出てくるが、「へい郵便が参りました。」と一度発話するだけなので、「下女たち」の中に含めた。

15 当時の日本の一般的夫婦関係として、夫の庄太郎を上、妻のお糸を下、と位置づけても妥当であろうが、両者のやり取りには微妙な部分もあるので、この表ではとりあえず印を付けずにおく。また、お糸と、お糸の友人の兄である幸之介との関係も、年上の幸之介を目上としてもよいが、言葉遣いからみれば幸之介は特に目上としてふるまっていないようなので、ここでは無印にしておく。

16 「心の鬼」からのセリフの引用は、基本的に青空文庫からの引用を用いるが、内容は全て、国立国会図書館所蔵『文藝倶楽部第三巻第二編』からの複写を用いて、確認している。セリフの引用の最初につけた番号は、本稿における発話切りの結果得た199発話に、小説での出現順に振った番号である。末尾のカッコの人名と→は、たとえば(庄太郎→重兵衛)は庄太郎から重兵衛に向けて発せられた発話を表す。下線は本稿筆者の付したものである。

17 もちろん、ここで現れなかったものが、当時の京都の実際の社会に存在しなかったとは限らない。

18 京都方言としては、ヤスの活用形として、ヤサ(しまへん)があると楳垣(1946)に記されている。ヤハンについては、楳垣(1946)にも奥村(1962)にも載っていない。しかし、大阪方言としては、楳垣(1955)および山本(1962)に、ヤスの否定形として、ヤサヘンとともにヤハンがあげられている。また筧(1962)によれば滋賀県方言の待遇表現の1つとしてヤスがあり、否定形としてヤサヘン・ヤサンの例文があげられている。

19 オヘン[ありません]は動詞オス[あります]に対応する否定形ではあるが、オスが活用しているというよりはオヘンのかたちで定型化しているのではないかと考えた。

20 清水紫琴「心の鬼」(明治30年)には、3.1で述べた通り、ハル12例があらわれた。少なくとも現在利用できる文字資料の刊行年という点からみれば、辻(2009)がハルが現れるものとしてあげている初代桂枝太郎「船辨慶」(明治32年)、四代目桂文吾「按摩」(明治32年)・「役者の嬢」(明治35年)・「夢」(明治43年)および桂藤朝「茄子の夢」(明治32年)の資料よりも早く、京都においてハルが出現した例、ということになる。「心の鬼」では35、6歳の商家の旦那とその妻の20代女性、7歳の女兒、商家の番頭から丁稚までが、ハルを用いている。このことから、明治30年時点の実社会で、ハルは、出始めの目新しい表現というわけではなかったのだろうとは思われる。

参考文献

- 磯貝英夫(1981)「日本近代文学と方言」『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢Ⅱ 方言研究の射程』三省堂
- 内田聖子(2013)『清水紫琴-幻の女流作家がいた』日本文学館
- 榎垣実(1946)『京言葉』高桐書院
- 榎垣実(1955)「船場言葉」『近畿方言双書第二冊』近畿方言学会
- 江種満子(2003)「清水豊子・紫琴(一)-女権の時代-」『文教大学文学部紀要』17-1
- 奥村三雄(1962)「京都府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 寛大城(1962)「滋賀県方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 金沢裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 木村東吉(1981)「近代文学に現れた全国方言 近畿1」『藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢Ⅱ 方言研究の射程』三省堂
- 古在由重編(1983)『紫琴全集 全1巻』草土文化
- 清水紫琴(1897)「心の鬼」『文藝倶楽部』3-2
- 田中牧郎(2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究』博文館新社
- 辻加代子(2009)『「ハル」敬語考』ひつじ書房
- 中山和子(1990)「清水紫琴研究」『明治大学人文科学研究所紀要』別冊10
- 村上謙(2010)「明治大正期関西弁資料としての上司小剣作品群の紹介および否定表現形式を用いた資料性の検討」『近代語研究』15 武蔵野書院
- 村上謙(2013)「明治大正時関西弁資料としての曾我廼家五郎喜劇脚本群」『埼玉大学国語教育論叢』16
- 村中淑子(2015)「大阪方言におけるナサル・ナハル・ハル等の変遷について-幕末期から織田作までの予備的検討-」『地域言語』23
- 山口玲子(1977)『泣いて愛する姉妹に告ぐ-古在紫琴の生涯』草土文化
- 山本俊治(1962)「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

【編集後記】

『現象と秩序』第2号をお届けします。創刊号より、執筆者数、論文数、頁数のすべてが増えています。どうぞご堪能下さい。

なお、本号掲載の大上梨奈論文は、発達障害中途診断者3名への長時間インタビュー記録を後半に含んでおり、公開が待ち望まれていたものです。これまでの大上氏の研究への言及は、(大上・榎田,2012)に言及対象を限られていましたが、これからは、この(大上, 2015)への言及も多くなるでしょう。

次号は、半年後、2015年10月発行を目指しています。慶應義塾大学の池谷のぞみ氏の神戸での講演記録等の掲載予定です。どうぞ続けてよろしくお願いします。

注記:『現象と秩序』第1号は、ヘッダーの柱に混乱があったため、2015年1月にWEB版のその部分を更新しました。(Y.K.)

『現象と秩序』編集委員会 (2014年度)

編集委員

榎田美雄 (神戸市看護大学)

中塚朋子 (就実大学)

堀田裕子 (愛知学泉大学)

印刷協力

村中淑子 (桃山学院大学)

編集幹事

谷口晴絵 (神戸市外国語大学)

城野真衣 (神戸市外国語大学)

『現象と秩序』第2号

2015年 3月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 榎田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (ダイヤルイン)

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>